

学年だより

義務教育学校 第7学年

第1号

令和2年
5月11日発行



五月を迎えて

7学年主任

艶やかな新緑がまぶしい季節を迎えました。五月の声を聞き、暦の上では立夏です。四季がある国は世界には幾つもありますが、私たち日本人は季節の変化を敏感に感じ古来より様々な形で愛でてきました。「立夏」「春分」などは一年を24等分した「二十四節気」のひとつです。それをさらに細かく分け、気象の動きや動植物の変化を知らせる「七十二候」も日本人の生活に密着して生まれた言葉です。「玄鳥至」(つばめきたる)や「竹笋生」(たけのこしょうず)などが挙げられますが、現代の私たちには難解な読み方もあります。休校が長引く中、3月下旬頃暦の「桜始開」が目にとまり「何って読むのかな?」と思いましたが、正しく読めなくとも何となく意味がわかるような気がしました。「さくらはじめてひらく」と読むようです。日本で「花」といえば平安時代以降は桜を指す言葉になっています。本格的な春の訪れを告げ、日本中を華やかに彩る桜は、暦にも記され季節の移ろいを感じる花なのです。春の気候や情景を表す言葉にも「こぼれ桜」、散りゆく様の「花吹雪」や「花筏(はないかだ)」、幻想的な「花明かり」など、桜を愛する日本人らしい感性にあふれた美しいことばがたくさんあります。しかし、桜が目されるのは春のひとつきに過ぎません。花が散り、夏を迎える今の季節は、まぶしい光を受け幹に青々とした葉を茂らせ、そして、秋にはその葉を深紅に染め上げます。では、冬の桜をみなさんは思い起こすことができますか? 葉を落とし幹だけがしっかりと立っている寒々しい桜ですが、冬こそ大地からの恵みを十分に蓄え、次の春に備えているのです。これら3つの季節があるからこそ、春に華やかに咲き誇ることができるのです。

学校再開が待ち遠しいですが、満開の花を咲かせるために十分な蓄えをする桜のように、今はみなさん一人一人がしっかりと充電して準備する期間です。自らの幹を丈夫にし、しっかりと根を張り、学びの葉を茂らせていきましょう。そして、これまでの自分を振り返り、「こんな附属生になりたい!」という強い意志を固めておいてください。安心して集い、学ぶことができる時が来たら、校訓「自主協同」のもと108人の仲間はもちろん、先輩と共に多くのことを学び、深めましょう。教室で共に過ごすことが今は叶いませんが、離れていても先生方はそんなみなさんを全力でサポートします。

保護者の皆様方におかれましては、お困り事、ご心配事などなどご遠慮なくご連絡頂きたいと思っております。何事におきましても、家庭と学校が協力・連携を図りながら進めて参りたいと思っておりますので、今後とも附属義務教育学校へのご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

